

保育者養成教育としてのピアノレッスンにおける オンライン授業実践の省察

横山真理* 酒井国作** 藤原一子** 森田千智** 山本馨栄子**

1. はじめに

本稿は、東海学園大学教育学部教育学科（以降、本学）における保育士資格・教職免許取得に関する専門科目「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「音楽Ⅳ」（以降、個別に表記する必要がある場合は「音楽科目」と総称する）におけるピアノレッスンにおいて行なわれたオンライン授業実践を省察し、保育者養成教育を受ける学生がピアノ演奏に関する知識・技術を修得することによって、オンライン授業にはどのような利点と問題点があるのかを明らかにすることを目的とした授業実践報告である。

2020年3月、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の流行に対応した新年度の大学授業における遠隔授業システム（本学の場合はMicrosoft Teams、これ以降Teamsと略称）の導入方針を受けて、従来は対面で行ってきたピアノレッスン（担当教員が学生に対してピアノ演奏に関する知識・技術の修得のための実技指導を1対1で行う個別的な指導形態）をどうすれば遠隔授業システムに組み込むことができるかという、ピアノレッスンにおける新しい指導-学修形態の再設計を余儀なくされた。そこで、今年度のピアノレッスンにおけるオンライン授業実践の一端を記録することを通して、「ポスト・コロナ」（『教職研修』編集部2020）と呼ばれる新たな時代の大学授業における学びのかたちへの手がかりを得なければならぬ、それは授業研究者としての応答責任でもあると考えた。これが、本稿執筆の動機となっている。

本稿の構成は以下のとおりである。最初に、「音楽科目」でのピアノレッスンにおけるオンライン授業の導入の経過を振り返る。次に、ピアノレッスン担当教員が各々のピアノレッスンにおけるオンライン授業実践の成果と課題について省察的に報告する。最後に、保育者養成教育を受ける学生のピアノ演奏に関する知識・技術の修得によってオンライン授業にはどのような利点と問題点があるのか考察し、今後の研究課題を明らかにする。

2. オンライン授業の導入と実践の経過

はじめに、本学における「音楽科目」でのピアノレッスンにおけるオンライン授業の導入の経過を振り返る。2020年に入りCOVID-19対応のため、国内では学校種を問わずこれまで教室において空間と時間を共有しながら対面して学び教えるという「授業」の在り方の再構築が迫られた。当然、従来「音楽科目」において対面でなされたきたピアノレッスンの形態や方法の再設計も余儀なくされた。本学では学生及び非常勤講師を含む教員全員がTeamsを共通のプラットフォームとして使用できる環境が用意され、そのプラットフォームを基盤に「音楽科目」における遠隔授業の方法を計画することができた。「音楽科目」では、音楽パフォーマンスを扱う科目の性質上、遠隔授業¹⁾においても面接授業²⁾においても音楽演奏のやり取りが必須となる。従って、学習コンテンツとしての演奏動画を配信し学修資料として活用させたり、リアルタイムでピアノレッスン担当教員が模範演奏を演示し学生が観察したり、学生自身がピアノを演奏しそれに対して教師が助言したりといった演奏情報のやり取りを円滑に行う上で、Teamsは「音楽科

* 東海学園大学教育学部 ** 東海学園大学教育学部非常勤

目」において必携のツールとなった。さらにはピアノレッスンにおける学修と指導を記録する「学修記録」(Wordで作成)も Teams のチャット機能を活用して相互配信され学生と教員とのピアノ演奏を共通項としたコミュニケーションが持続するなど、学修環境プラットフォームとしての Teams の効果を感じている。今後も「音楽科目」の実践において、Teams はコロナ禍での限定的な道具ではなくむしろデジタルの力を駆使した新しい学びの形を推進する上で強力なプラットフォームとして機能する可能性をもっていると考えているが、この点については別稿に譲る。

2020年度のピアノレッスンにおけるオンライン授業の導入と実践の経過は、表1のとおりである。

表1 ピアノレッスンにおけるオンライン授業の導入と実践の経過

時期・授業回	授業の準備・形態	内容
3月	春学期授業の全体計画の作成	課題提示型及びオンラインによるピアノレッスンの全体計画を作成した。
4月	教員研修	オンラインによるピアノレッスンのための実際的な情報の提供し、模擬授業を実施した。
	「音楽Ⅰ」「音楽Ⅲ」受講学生ガイダンス	課題提示型及びオンラインによるピアノレッスンに関するガイダンス動画を配信した。
第1～3回	遠隔授業 (<u>ピアノレッスン実施の準備</u>)	課題提示型授業。Teams の課題提示機能を活用し、PDF 資料や動画教材を配信しそれらの資料を利用して課題に取り組みその成果物をオンライン上で提出させる方法により実施した。ピアノレッスン担当教員と担当教員グループの学生同士が Teams のビデオ会議機能を使ってオンラインでつながる練習を行った。
第4～7回	遠隔・面接隔週交代授業 (<u>ピアノレッスンあり</u>)	本学方針に基づき、学生を2グループに分け分散して受講する形態により、1グループの学生がオンラインレッスンを受講している同時時間帯に2グループの学生は大学内で講義を受講させ、それで隔週で交代する方法を採った。
第8～13回	面接授業 (<u>ピアノレッスンあり</u>)	学生全員がピアノレッスン担当教員のもとで面接によるピアノレッスンを受講した。
第14～15回	遠隔授業 (<u>ピアノレッスンあり</u>)	学生全員がピアノレッスン担当教員のもとでオンラインによるピアノレッスンを受講した。「クラス授業」での講義内容については、課題提示型を採った。
8月	秋学期授業の全体計画の作成	ハイブリッド型授業(学生全員が大学内で受講するが、面接による講義形式の授業、面接によるピアノレッスン、遠隔によるピアノレッスンを併用する授業形態)を計画した。
9月	教員研修	ハイブリッド型授業の進め方について共通理解を図った。
	「音楽Ⅱ」「音楽Ⅳ」受講学生ガイダンス (<u>ピアノレッスン実施の準備</u>)	ハイブリッド型授業の受講方法に関するガイダンス動画を配信した。
秋学期 (～12月1日 現在)	ハイブリッド型授業 (<u>ピアノレッスンあり</u>)	全員の学生が学内の指定された教室でピアノレッスンを受講するが、ピアノレッスン担当教員によって、学内外からオンラインレッスンを行う教員(A)と、学内で面接レッスンを行う教員(B)とに分けて実施した。

3. オンラインによるピアノレッスンの省察

3.1 オンライン指導への環境整備と基本指導手順の構築

本節では、従来面接で行なっていた「音楽Ⅰ・Ⅱ」における面接レッスンをオンラインレッスンに変更するにあたって筆者(酒井)が行なった、ピアノ演奏の実技指導の基本的な手順の構築・再検討とその実践を省察する。従来行ってきた面接レッスンでは、学生1人あたり10分～20分程度の持ち時間の中で、ピアノ演奏の基本的な技術を修得するための教則本による実技指導や、教育現場で実際に使用される子どもの歌が掲載された楽譜集を使用した弾き歌いの指導を行ってきた³⁾。オンラインレッスンにおいては出席の手続きの確認を始め他の授業一般に共通する課題もあるが、ここでは特に従来面接により指導していた、①模範演奏演示、②ピアノ演奏の初歩的な技術指導、③弾き歌いの指導における簡易楽譜の提示、④

弾き歌いにおける歌唱指導、についてオンラインレッスンをどのように実践したかを報告する。

(1) 実践の概要

オンラインレッスンでは、Teamsのチャット機能を利用して、ピアノレッスンを担当する個々の学生と学修記録をやり取りした。筆者による学修記録の活用方法は表2のとおりである。

表2 学修記録の活用方法（筆者の場合）

	学生	教員
「到達目標」 「目標達成の方法」	i) 事前に前回の自己反省を踏まえて、該当する回の授業に向けて、予め「到達目標」「目標達成の方法」を記入して提出する。※1,2 iii) ii) のアドバイスをもとに練習・レッスンの準備をする。	ii) i) の提出後概ね2日程度で内容を確認しアドバイスを学生に返却する。※3
レッスン中	iv) 「到達目標」が達成できているかどうかを両者で確認し、評価を共有し、その原因を探る。 v) iv) を踏まえて次回の「到達目標」を設定し、それに向けての「目標達成の方法」を検討する。	
「自己評価」	vi) レッスン終了後速やかにレッスンを振り返り、記入をして提出する。※1,2	vii) 「担当教員のコメント」欄に記入し、学生に返却する。※3

注 ※1 学生の反応を見ながら、後に前回のレッスンの終了後2日後までに提出するよう期限を設けた。

※2 i) ~vii) のサイクルを1週間で回すために、vi) と次の回のi) は同時に記入して提出する。

※3 ii) は前回の「担当教員のコメント」に記入してvii) と一緒に返却する他、チャットを補完的に活用する。

① 模範演奏の演示：模範演奏の演示については、できる限りオンラインレッスンの最中に提示できるように環境を整備した。学生にとってのわかりやすさを心がけ、教員側はPC (MacBook Air) にGoProのコネクタとマイクスタンドを利用してWebカメラを接続し、教員側のピアノの真上から鍵盤と教員の手を映して、学生に学習曲の模範演奏を演示した（図1）⁴⁾。



Webカメラを設置したところ。オンライン用マイクへの入力レベルの調節が容易であるため電子ピアノを用いた（Rolland DP603）。ふたを閉めると平机となり、そのままWebカメラは書画カメラのようにして楽譜を表示できる。実際の指導時には電子ピアノの右側にPCを置いて実施したが、音声入力にはPC本体のマイクで特に不都合はなかった。

図1 オンラインレッスンのための機材（筆者の場合）

② ピアノ演奏の初歩的な技術指導：面接レッスンであれば、その場でやり取りしながら鍵盤を弾く学生の手指の操作について助言することができる。しかし、オンライン上ではそのような直接的な指導ができない。そこで、①のようにWebカメラでピアノの真上から鍵盤と教員の手を映し、リアルタイムで会話しながらできる限り面接レッスンに近い状況の中でピアノ演奏の初歩的な技術の伝達が行えるようにした。なお、楽譜上の注意事項や説明には、楽譜をコピーしてクリアファイルに挟み、Webカメラを書画カメラのように活用して、会話をしながらクリアファイルの上から太いマーカーで書きこんで学生に提示して、学生に写してもらったようにした。

③ 弾き歌いの指導における簡易楽譜の提示：弾き歌いの指導の際、面接レッスンでは学生に五線紙に楽譜を書かせて添削をしながら指導していたが、オンラインでは細かい楽譜の書き方の指導は難しい。そこで、学生の能力に合わせた簡易楽譜を教員側で作成して学生にチャットで配信した。楽譜の作成にはFinaleを用い、運指番号を予め記入して練習の便宜を図った⁵⁾。歌詞は与えた楽譜を練習する際に学生自身に記入させ、レッスン時に適宜アドバイスをして歌詞の意味とメロディの関係を考える機会とした。

④ 弾き歌いにおける歌唱指導：弾き歌いにおける歌唱指導は、オンラインレッスンを受講する学生（通信状態や、自宅や下宿の場合の部屋の状況やカメラの設置状態、学内の場合は他の学生が同室で活動している、など）を考慮すると、すべての学生の指導において平等性を確保しオンラインでリアルタイムに指導するのは難しいことがわかった。そこで、個々の学生に自分の演奏を録画し動画ファイルをTeamsから提出してもらい、教員は提出された演奏動画を視聴し、オンライン指導時やチャット・学修記録へのコメントを利用して助言するという方法を採用した。

成果

今年度は半ば強制的にオンラインレッスンに移行せざるを得なかったが、これを機会に大学教育のあり方が問われている。様々な問題点があるものの、オンラインレッスンを実践したことにより、従来は面接が当たり前であったピアノレッスンについてオンラインの長所を生かした指導法を考える契機を得た。例えば、以上に報告した①模範演奏の演示については、学生の状況に応じて様々なテンポや奏法により演示することができ、ほぼ面接レッスンの時と同じように指導することができた。また、面接レッスンでは学生は演奏者の視点（真上）から教員が模範演奏する手を観察することは現実的には不可能であるが、オンライン環境で教員側のピアノの真上から鍵盤と教員の手を映す方法により、学生にとっては却って分かり易いこともわかった。②ピアノ演奏の初歩的な技術指導については、前述のとおり頭上からのカメラアングルが効果的であり効率的な指導ができたと評価している。Webカメラによる楽譜上の注意事項や説明は、カメラの解像度が読譜に必ずしも十分なものではなかったものの、学生も同じテキストを手元に用意して受講しているため、面接レッスンとほぼ同じように指導をすることができた。③弾き歌いの指導における簡易楽譜の提示および④弾き歌いにおける歌唱指導についてはオンライン環境の利点が大いに発揮された。教員も学生も思う存分歌いながら弾くことができ、演奏をオンライン上で交流することができたからである。

課題

やむを得ないとはいえ、オンラインレッスンの効率が通信や機材の環境に大きく依存してしまった。前述の報告①および②については、オンデマンドによる動画配信の場合とは異なり、オンタイムによる双方向型のレッスンでは常にデータ通信が遅延したり不安定になったりするリスクが付きまとう。図2はオンラインレッスンを成立させる環境・要素の具体を例示したものであるが、この図から明らかなように、これらの環境・要素の一つでも不具合が生じると、途端にオンラインレッスンは滞ってしまう。したがって、学生側・教員側双方に満足できる環境を確保すること、オンラインレッスンに必要な機器の取り扱い技術の習得やオンライン環境システムの構築（松井・竹川・平田2018）が、教員と学生双方にとっての今後の大きな課題となるだろう。

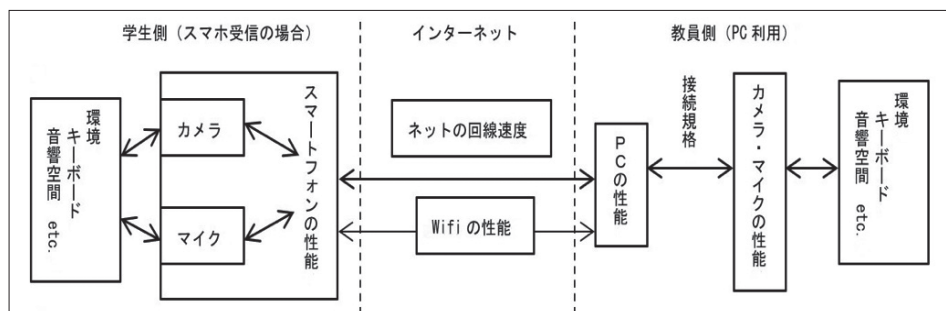


図2 オンラインレッスンを成立させる環境・要素（筆者作成）

3.2 補助教具としての「音ゲー動画」の活用

本節では、「音楽Ⅲ」においてTeamsを使ったオンラインレッスンの補助教具として筆者（藤原）が作成した「音ゲー動画」（図3）の作成手続きを紹介し、「音ゲー動画」の予習・復習への活用を意図した実践と、オンラインによるピアノレッスンの実践を省察する⁶⁾。本稿における「音ゲー動画」とは、「音楽ゲーム」を模した画面を利用し、鍵盤楽器の演奏に関する基本的な技術を修得するための補助教具として作成した動画を指す。「音ゲー動画」では、デバイスの画面下部に鍵盤が表示され、画面上部から打鍵する音が帯となって降りてくる。降りてくる帯を視聴しながらタイミングよくピアノの鍵盤を弾くと、楽譜通りの演奏を行うことができる。音名や指使いの提示はなされていない。

保育者養成教育として実践されるオンラインレッスンにおいて、指導の際にとりわけ困難が伴うのはピアノ演奏初学者に対する指導であり、特に、①ピアノ演奏初学者は読譜に慣れておらず、音やリズムを間違えて練習していることがある、②ピアノ演奏初学者は音と鍵盤と指の一致に躓きを抱えている、という問題がある。これらの問題を解決するには面接での指導が有効である。しかし、オンラインレッスンは遠隔で行われタイムラグが生じるため、学生と教員が同一鍵盤を使用したり同時演奏を行ったりすることができない。そこで、視覚的かつ聴覚的に音やリズムの確認ができ音と鍵盤と指の操作が直感的に認知できる「音ゲー動画」を作成し、読譜に躓きを抱えているピアノ演奏初学者の学生に対して、予習・復習の補助教具として提供する方法を考えた。

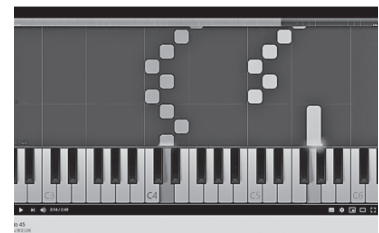


図3 音ゲー動画

(1) 補助教具としての「音ゲー動画」作成・配信の手続き

- ① 作成時期・作成者：2020年5月に、藤原が中心に作成し、横山が編集作業を補助的に行った。
- ② 使用楽曲：『全訳バイエルピアノ教則本』よりNo.12～No.106から69曲を抜粋した。
- ③ 使用ソフトウェア：KAWAIスコアメーカー Platinum (Ver.11.0.02)（以下「スコアメーカー」と略記）⁷⁾、Synthesia (Ver.10.6)（以下「シンセシア」と略記）⁸⁾、Filmora Scrn (Ver.2.0.1)（以下「動画編集ソフト」と略記）。
- ④ 作成の方法：「スコアメーカー」で作成した楽譜をMIDIに変換し、「シンセシア」を使用してデジタル再生した。これを「動画編集ソフト」で動画をデータとして取り込み、mp4ファイル形式で書き出した。書き出す前に、以下の⑤～⑦の方法により編集した。
- ⑤ 演奏のテンポ設定：No.12～No.40までは、60bpm（ゆっくりのテンポ）、100bpm（速いテンポ）の2種類とした。テンポを固定することで、それぞれの音符の長さが感じ取りやすくなり、ピアノ演奏初学者が学びやすくなったと考えたからである。No.45以降は、それぞれの曲に表記されている速度記号を「スコアメーカー」に入力して自動演奏させた。速度記号が書かれていない曲については、城戸・森山・岸・横山（2003）を参考にして演奏再生速度を決定した。
- ⑥ 演奏順：右手、左手、両手の順で提示した。
- ⑦ メトロノーム：前打ち1小節の後に演奏を開始した。演奏中は学生が拍を把握しやすいように、常時メトロノームが鳴っている状態にした。
- ⑧ 動画のアップロード：作成した「音ゲー動画」をYouTube Studioにアップロードして⁹⁾ URLを入手した。公開設定は「限定公開」とした。
- ⑨ QRコードの作成：アララ株式会社が提供するQRコード作成サービスである「クルクル マネージャー」を使用して先述のURLをQRコードに変換した¹⁰⁾。
- ⑩ PDFファイルの作成：以上の手続きから入手した「音ゲー動画」のURLとQRコードをWordファイル1ページにつき1曲が収まるように表を作成して貼り付けた。その際、次の報告にある森田千智が作成した「手元動画」のURLとQRコードが対になるように配置した。そして、WordファイルをPDFファイル

に変換した。

① 学生への提供方法：学生への動画の提供は、Teamsのチャットに先述のPDFファイルを添付して行った。動画の視聴については当該授業履修期間中に利用可能な状態とした。

(2) 実践の概要

筆者が担当した学生は「音楽Ⅲ」の4名であり、《バイエル》学修中の学生は2名であった。そのうちの1名（学生A）について報告する。

オンラインレッスンについては、以下のような手続きで実践した（表3）。オンラインレッスンの最中に、学生が練習している曲の中で躓いている箇所はどこなのか、また、どのような躓きを抱えているのかを、学生自身が「言葉」で教員に伝える時間を設けた。そして、教員は学生の「言葉」を、音楽専門用語を用いて言い換えた。その後、学生と教員が対話と演奏を行って、問題となっている要因を一つずつ言語化して、学生が抱えている躓きを解決していった。ある時、学生Aが「楽譜が読めない」と発言したことがあった。その発言から学生Aには読譜に躓きがあることがわかり、その発言をきっかけにして「音ゲー動画」と「手元動画」をセットにして紹介した。その結果、音ゲー動画の活用については、学生Aの学修記録を見ると、「音ゲー動画を見ながら練習する」という記述が複数回（6月12日、7月31日、8月6日）あった。また、「音ゲー動画」の使用実態を知るために7月9日にWebアンケート調査を実施した¹¹⁾。設問1「「音ゲー動画」をより多く視聴した理由は何ですか」に対して、学生Aは「楽譜が読めないので、まず自分で音階¹²⁾を書いてから、いつも音ゲー動画で音があっているかの確認をしています。片手ずつ練習するときに、音ゲー動画でスピードを合わせながら右手、左手をそれぞれ練習しています。音ゲー動画と同じスピードで片手ずつ弾けるようになったら、自分のペースで両手での練習をするようにしています」と回答していた（設問1については自由記述式）。その回答から、「音ゲー動画」を日々の練習に活用していることが推測された。設問2「「音ゲー動画」は、ピアノの練習の助けになりましたか？」に対しては「大変助けになるものだった」、設問3「他のピアノ演奏曲の「音ゲー動画」を作成して欲しいですか」に対しては「はい」と回答していた（設問2、3については多肢選択式）。学生Aの学修記録の「春学期を終えて（自己評価）」をみると、「ピアノ初心者なので、オンラインでのレッスンに不安がありましたが、（中略）苦手な部分やどうしても出来ない！という部分を話すことで詳しくどうすればやりやすいかを考えていただけだったので、自分の苦手箇所を直すことが出来ました」という記述があった。

表3 オンラインレッスンの流れ（筆者の場合）

	学生	教員
レッスン 前日までに	学修記録「到達目標」「目標達成の方法」を記入する。 (学生が演奏において躓いている箇所を具体的に記入する)	学修記録「到達目標」「目標達成の方法」に目を通して、 オンラインレッスンで主に取り上げる指導内容を記入する。
レッスン中	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が演奏においてどのような躓きを抱えているのかを、学生自身が「言葉」で教員に伝える。 ・教員は学生の「言葉」を、音楽専門用語を用いて言い換える。 ・学生と教員が対話と演奏を行って、問題となっている要因を一つずつ言語化して、学生が抱えている躓きを解決していく。 	
	学生自身が楽譜に注意事項を書き込む。	教員は学生が楽譜に書き込む時間を設ける。
レッスン 翌日までに	学修記録「自己評価」を記入する。	学修記録「自己評価」に目を通して、次のレッスンに向けての アドバイスを記入する。

(3) 成果

ピアノ演奏初学者で読譜に躓きを抱えている学生Aはオンラインレッスンに不安を抱いていたが、配信

された「音ゲー動画」を参考に、自発的にピアノ演奏の練習を継続させることができたのではないかと推測する。その結果、演奏において躓いている箇所が学生の中で明確化され、オンラインレッスンにおいては、学生A自身が日々の練習の中で自らが抱えている躓きを、教員に「言葉」で伝え、解決方法を求めることができたのではないだろうか。

以上から、「音ゲー動画」の活用により、学生は自発的に予習・復習としてのピアノ演奏の練習を行い、それによりオンラインレッスンを主体的に受講することができたのではないだろうか。実際に学生Aの学修記録の「春学期を終えて（自己評価）」をみると、「オンラインという形ではありましたが、自分の中では多くの曲を弾けるようになったので、良かったです」という記述がある。この記録からも、予習・復習場面での「音ゲー動画」の活用が、オンラインレッスンでの主体的な学びにつながり、結果的に短時間でのオンラインレッスンを効果的に行うことができたのではないかと評価している。

(4) 課題

今後の課題は二点ある。第一に、本実践の結果、「音ゲー動画」は学生Aの自発的な練習にとって有効だったといえよう。しかしながら、この度の実践では事例が1例と限られているため、他の学生においても自発的な練習の足場として機能するのか事例を蓄積して省察的に検討する必要がある。第二に、音ゲー動画の使用に関しては、注意が必要である。学生が楽譜を見ずに音ゲー動画に頼りすぎてしまう場合は、読譜の躓きが取り除かれなまま曲が難しくなり、躓きが増してしまう可能性がある。ピアノ演奏初学者の学生に対する読譜支援についても考えていく必要がある。

3.3 補助教具としての「手元動画」の活用

本節では、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」においてTeamsを使ったオンラインレッスン及び面接レッスンの補助教具として筆者（森田）が作成した「手元動画」（図4）の作成手続きを紹介し、「手元動画」を予習・復習に活用することを意図した実践を省察する。なお、本稿における「手元動画」とは、教員の模範演奏動画のことで、ピアノ演奏者が演奏をしている時の手元を録画した動画を指す。



図4 手元動画

(1) 補助教具としての「手元動画」作成・配信の手続き

- ① 演奏動画の撮影時期・場所・演奏者：2020年5月、6月に筆者の自宅で撮影を行った。演奏者は筆者。
- ② 演奏曲：『バイエルピアノ教則本』よりNo.12～No.106から69曲を抜粋した。
- ③ 使用楽器：ピアノ（YAMAHA C5B）。
- ④ 使用機器：スマートフォン（iPhoneSEMXD12J/A）。
- ⑤ 撮影方法：スマートフォンのカメラアングルについては、演奏者の手元と鍵盤が映るようスマートフォンを鍵盤の真上から固定して撮影を行った。
- ⑥ 演奏のテンポ設定：先の報告にある藤原作成の「音ゲー動画」のテンポに揃え、No.12～No.40までは二種類のテンポ（♩=60と♩=100）で、No.45以降はそれぞれの曲の冒頭にある速度記号に従って一種類の速さで演奏した。
- ⑦ 演奏順：1曲について右手、左手、両手の順に演奏し、1セットの動画として編集した。
- ⑧ メトロノーム：拍子が分かるように演奏と同時にメトロノームの音も録画した。
- ⑨ 動画PDFファイルの作成：作成した「手元動画」を1セットごとYouTube Studio¹³⁾にアップロードしてURLを入手後、QRコード¹⁴⁾を作成し、QRコードと動画のリンク先を掲載したPDFファイルを作成した。その際、1セットごとに藤原作成の「音ゲー動画」のQRコードと動画のリンク先も対になるように作成した。
- ⑩ 配信方法：以上の手続きで作成した「手元動画」のファイルをYouTubeの限定配信を利用し、当該授

業履修期間中であれば学生自身がいつでも利用可能な状態にした。

(2) 実践の概要

筆者は「音楽Ⅰ」で14名の学生を担当し、「音楽Ⅱ」では10名の学生を担当している。そのうち、《バイエル》の学修者は「音楽Ⅰ」において12名、「音楽Ⅱ」において9名である。動画PDFファイルは、初学者全員に配布し、ピアノ演奏経験者に対しては動画の概略を説明した上で希望者に配布した。配布は、学生が新しい曲を練習し始めるのと同時にその曲の動画PDFファイルをTeamsの学生のチャットに添付した。また「音楽Ⅰ」の初学者に対しては、動画PDFファイルと共に楽譜に拍子や指番号等の記入例を示したファイルをチャットに添付した。「音楽Ⅱ」では、「音楽Ⅰ」において基礎的な楽典を既習済みであることから、動画PDFファイルのみを学生のチャットに添付した。

下記の表4～7は、学生の学修記録より「動画」に関する記述である。学生B、C、Dは、「音楽Ⅰ」（6月1日～8月3日）での学修記録、学生Eは、「音楽Ⅱ」（9月21日～11月2日）での学修記録から抜粋したものである。学生B、Eはピアノ演奏経験者、学生C、Dは初学者である。なお、学生B、C、D、Eは「手元動画」のみ使用しており、記述中にある「動画」とは「手元動画」のことである。

表4 学生Bの動画に関する記述

月日	目標達成の方法	自己評価
6月 22日	先生から送られてくる動画を見ながらリズムをしっかりと把握して弾く。	B45は右手左手の入れ替えを前回よりは上手くできた。B46はリピート記号の後の部分がややこしくて弾けなかったのをそこを重点的に練習していきたい。テンポが速くて指が追い付いていないのでゆっくり丁寧に弾く練習をしていきたい。
6月 29日	先生から送られてくる動画を見ながらリズムをつかみゆっくり練習する。	ややこしい部分がありすらすら弾くことが出来なかった。右と左でどちらかがどちらかにつられてしまうことがあった。

表5 学生Cの動画に関する記述

月日	目標達成の方法	自己評価
6月 29日	動画を見ながら片手ずつ練習する。	前回のときよりもスムーズに弾けるようになったなと思いました。指番号を書いて指で覚えるやり方が自分には合っているなど感じました。なので、これからもこのやり方でやっていこうと思います。

表6 学生Dの動画に関する記述

月日	目標達成の方法	自己評価
6月 29日	はじめは左右別々に弾けるようになるが、合わせるときは弾けないところから練習し、弾ける部分を増やしていく。曲のイメージをしっかりとつ。	練習の時にYouTubeの動画を見て、どんな感じで音が重なって聞こえるのかイメージが持てたので出した音が違っていったときに修正することが出来ました。
7月 6日	前回と同様にYouTubeの動画を聞いて、音の重なりイメージをつかむ。	今回は音の重なりをイメージするのが早く出来たので自分の力だけでやる事が出来ました。

表7 学生Eの動画に関する記述

月日	到達目標	自己評価
11月 2日	特にバイエルは、先生が送ってくださったのを先に聞いてからリズムを理解してから弾く。	バイエルは、練習の時スムーズに弾くことが少なかったけれど今日はスムーズにひけて良かった。

(3) 成果

「手元動画」を活用したという学生に「いつ」「どのような場面で」視聴したかを質問すると、「いつ」に対しては、「予習で」「読譜をする前に」視聴したという意見が多く聞かれた。そのことは、例示した学生Eの記述（表7）に「先に」とあることから確認できる。「どのような場面で」に対しては、「どのような曲か知りたいとき」「曲のイメージを知りたいとき」「リズムが分からないとき」と答える学生が多かった。「曲の感じ」や「曲のイメージ」と答えた学生には初学者が多かったが、「リズム」と答えた学生は初学者だけでなく学習経験者からも同じ意見が出た。実際にピアノ演奏経験のある学生B（表4）や学生Eの学修記録（表7）にも、「手元動画」から「リズム」を参考にしたことが記述されている。その他の場面として、学生Dの学修記録（表6）には、「音の重なり」を「イメージ」する際に視聴したことが記述されている。初学者の学生Dは、《バイエル》の学修内容が進むにつれて、楽譜を見ただけでは演奏する指の動きや音楽を思い描くことができないことを不安がっていた。しかし、「手元動画」が視覚的に認知できる演奏行為と聴覚的に認知できる音響とを統合した情報を提供しており、それが学生Dにとってどのように演奏をすれば良いのかを理解する上で効果があったと言える。

初学者にとって楽譜からどのような手や指の動きでどのような音楽が表現されるのか想像することは非常に難しい。ピアノ演奏経験者でさえも、楽譜から音の長短を判別し楽譜に記譜された通りに音をリズムとして再現することや、その演奏が記譜通りなのか間違っているのかを識別することは難しい。したがって、学生たちにとって楽譜だけでは自らの演奏の手かかりとして脆弱だが、楽譜と対になった「手元動画」を視聴することによって、演奏する自分の手や指の動きと共に記譜された音やリズムを頭の中で思い描くことが可能となり、演奏することが容易になるのではないだろうか。

以上より、視覚情報と聴覚情報が統合されたマルチメディアとしての「手元動画」は、学修者の演奏練習に効果的に役立つことが期待できる。また本実践の期間、動画を練習で活用している学生はどの学生もそれぞれの課題を明確にしてレッスンに臨む姿があったことから、動画によってどのような音楽なのかを知る手がかりを得ることができれば、「弾いてみよう」「練習してみよう」というピアノ演奏への興味や練習の意欲が高まり、自発的な演奏練習をすることができるようになることも期待できる。

(4) 課題

「手元動画」の補助教具としての活用は、学生が手や指の動き方や音楽を想像する手がかりとして、また手がかりを得たことにより自発的に練習に取り組むという点においては期待できるが、読譜という点においては不安が残った。「手元動画」の視聴により演奏できるようになったということは、「手元動画」の模倣をして弾けるようになったと捉えることもできる。これでは、楽譜から音の高さや長さを正確に読み取り、音楽を再現する技能を身につけたとは言えないだろう。保育の実践場面では、季節や生活の歌、行事の歌など日々の生活の中に音楽があり、保育室の中にある鍵盤楽器を使って子どもたちと共に歌うことは日常の光景である。このような実践的な状況を想定すれば、保育者を目指す学生にとって、子どもの歌の楽譜を理解し、楽譜の指示に従って音やリズムを演奏する技能は、保育者として身に付けたい実践的能力だろう。このような考えから、今後は保育者の実践的能力としてのピアノ演奏の技術の修得につながるような補助教具としての「手元動画」の改良を今後の課題としたい。また、本実践では「手元動画」による学修効果についての検証を行うことができなかったため、検証方法の検討を含めて「手元動画」による学修効果を検証することも、今後の課題として残っている。

3.4 教師が用いる言葉の精選—読譜を中心に—

本節では、「音楽Ⅱ」において筆者（山本）によるオンラインレッスンの実践事例を紹介し、自立した学習者の育成を意図した実践を報告する。

大学入学時より初めてピアノ演奏を経験するピアノ演奏初学者の学生にとって、ピアノ演奏に習熟する

ことには多くの困難を伴う。「音楽Ⅱ」は春学期開講の「音楽Ⅰ」と連続性があり、学生らは既に半年間ピアノ演奏の経験を積んでいることになるのだが、ピアノ演奏に対する苦手意識を払拭することができない学生が散見された。その背景にはピアノ演奏以上に読譜力の修得に課題があることが推測される。ここでいう「読譜力」とは、西洋音楽の楽譜に記載された音楽記号の意味を理解し直ちに音楽として再現することができるスキルを指す。面接レッスンであれば、読譜力に課題がある学生に対して必要に応じて楽譜を指し示し説明したり、隣で模範演奏を演示したり、さらには学生と教員が同じ楽譜を見ながら同時演奏を行ったりするなど、リアルタイムで双方向的なやりとりや同調的な関わり合いが可能である。それにより、音楽的な文脈の中で読譜の力を養うことも可能になる。一方、オンラインレッスンにおいてはタイムラグが生じるため双方向的なやりとりや同調的な関わり合いが困難である。したがって、読譜力が未習熟であるがゆえに楽譜に従ってピアノを弾くことが難しい学生の状況に即座に対応し指導することも極めて困難になる。そこで学生自身が自立して楽譜に記載されている情報を理解しピアノを演奏することができるようにするために、1人あたり十数分という短い時間の中でどのような指導が必要なのか考え、以下に報告するように、読譜に関する初歩的な知識を共有する言葉の精選に重心をおいた実践を行った。

(1) 実践の概要

「音楽Ⅱ」で担当した11名の内、ピアノ演奏初学者の学生は8名であった。オンラインレッスンの最中に「楽譜の読み方について困っていること」をピアノ演奏初学者の学生に質問したところ、「音符をドレミ…で読めない」「楽譜の音符を読めても、ピアノのどの位置を弾けばいいのかわからない」「音符の長さがわからない」という返答が多かった。「どのような方法で練習をしているか」に対しては、「楽譜に指番号を書きこんでそれを見て弾いている」「YouTubeで指の動かし方を見て練習している」などの返答が返ってきた。そのことから、読譜に関する初歩的な知識が未定着であるというピアノ演奏を学ぶ初期段階での躓きがあり、その躓きのために、楽譜を読む行為よりも指番号通りに指を動かしたり動画を模倣したりすることが練習方法として優先される傾向があると推測した。そこで、課題として練習する曲に取り組みさせる際に、①読譜に関する初歩的な知識の共有、②ピアノ演奏の練習方法のステップ化、という2つの方策を考えた。以下、概要を報告する。

①読譜に関する初歩的な知識を共有する言葉の精選：オンラインレッスン時に学生と教師が手元に持っていた共通のテキストは、『Let's play the BEYER』と、『保育のうた155』である。面接レッスンであれば、例えば楽譜上の「 \downarrow 」や「 \uparrow 」を教師が指さしながら「四分音符」「八分音符」と言葉で言い表し拍を取りながら演奏することによって、学生も「 \downarrow 」や「 \uparrow 」を「四分音符」「八分音符」と読み音の長さを聴覚的に識別することができる。しかし、オンラインレッスンではそれが難しい。そこで、教師自身が楽譜に記載されている音楽記号（音符や拍子など）をわかりやすく学生に示すことができるような言葉の使い方をできるだけ統一した。例えば、「 \downarrow 」に対しては「四分音符」に対応した説明の言葉として「黒丸に棒」、 \uparrow 」に対しては「八分音符」に対応した説明の言葉として「黒丸にはたの付いた棒」¹⁵⁾ というように。また、学生が適切ではない用語の使い方を学修記録の中で行なっている際には、例えば「音階」→「音名」、「スピード」→「テンポ」という具合に、学修記録の中で適宜修正した。

②ピアノ演奏の練習方法のステップ化：新しい曲に取り組み際に、読譜に躓き練習が進まないという事態を回避するために、ピアノ演奏の練習方法1、2、3のようにステップ化して学生に提示した。

ステップ1. 楽譜に書かれている音符をイタリア語音名（ドレミ…）で読む。音名でスムーズに読めるようになるまで繰り返し読む。読む行為に慣れるまでの間は楽譜に音名を書くことを容認し、徐々に書き込む行為を減らすように促す。

ステップ2. 音符の長さを確認する。黒丸や白丸、棒、旗、付点の有無をチェックし、取り組んでいる曲において、楽譜に書き込まれている音符が何拍分なのかを確認する。

ステップ3. 該当曲の拍子に従って拍を手拍子で叩きながら拍に合わせて音名を読む。拍子に正確に音の

長さを当てはめて口ずさむことができるようになることが目的であり、音程の再現性は求めない。

(2) 成果

ピアノ演奏を苦手と感じている学生ほど、楽譜の読み方や練習方法が分からないという問題を抱えていた。レッスンの時間は短く、楽譜が読めないことを教師に伝えられずにいた。そこで、教師側が読譜に関する初歩的な知識を共有する言葉を精選し、楽譜の読み方を学生の進度に合わせて説明し続けた。その過程で、「四分の三拍子のリズムを意識・口に出しつつ練習してリズムをとれるようにする」、「八分休符が入ってきてリズムが難しい」、「ト音記号とヘ音記号が変わるところ」、「右手でソファレと弾き、左手でシレソと弾く部分」、「左手の音名読みに苦戦している」、「最後の二小節のリズムの取り方が難しい」(学生の学修記録より) など、自分が演奏している楽譜に対応した音楽を表す言葉を意識的に使ってレッスンを振り返る姿が生まれた。このように、音楽に関する言葉を用いず何が分からないのか伝える言葉ももたなかったピアノ演奏初学者が、ピアノ演奏に関する問題点を具体的に意識することができるようになってきたと推測する。以上に述べたような学生の変化については、ピアノ演奏の専門家である教師自身がこれまで当たり前のように使用してきた音楽に関する専門用語を自明視して用いるのではなく、ピアノ演奏初学者でありピアノ演奏の専門的な楽譜も初めて見る学生の立場に立つことから始め、①読譜に関する初歩的な知識の共有、②ピアノ演奏の練習方法のステップ化、という2つの方策をとったことが功を奏したと評価している。参考までに、学生Fの学修記録の一部を以下に掲載する。表8は秋学期序盤、表9は中盤の学修記録の抜粋である。それらの記録から、到達目標や目標達成の方法の記述に教員の言葉が取り入れられ、より具体的な振り返りができるようになっていることがうかがえる。

表8 学生Fの学修記録の記述例 (秋学期序盤)

表9 学生Fの学修記録の記述例 (秋学期中盤)

(グレー網掛け部分は教員が学生の記述欄に加筆した箇所)

2回 9月28日	到達目標	B45, 46, 48を指番号で覚えていたところを音階→音名に直して弾けるように練習する。B49は最後まで弾けるように練習する。
	目標達成の方法	楽譜に音階→音名を書き直し、番号で覚えていたところを音階→音名で覚えるまで練習を繰り返す。B49はリズムを速くして演奏してしまうので注意して練習する。 指番号→音名、がらりと取り組み方が変わりましたが、どうですか？スピード(音楽ではテンポといいませ)コントロールも重要ですね。一番難しい箇所がミスなく安心して弾ける速さが、その曲の「弾ける速さ」です。曲始めは簡単に弾きやすく、テンポが速くなりがちですね。気を付けたいポイントです。
	自己評価	今週は音階→音名で初めてやりましたが、まだまだ慣れませんでした。しかし授業中には読めるようになっていたと思うので、練習して秋学期の最後には音階→音名を書かなくても弾けるように、ピアノ練習と音階→音名を読んでいく練習をしていきたいと思えます。
3回 10月5日	到達目標	B49・B50を最後まで弾けるように練習する。
	目標達成の方法	音階→音名に注意しながら練習する。スピード→テンポが速くなってしまう癖があるので、意識して練習する。 不思議なもので、難しい箇所ほどテンポが速くなる、ということも起こります。これは気持ちの焦りから指のコントロール制御不能といった現象かもしれません。難しい部分こそ冷静に、出来る速さで、心掛けたいですね。
	自己評価	B49はしっかり練習したので、ほぼミスなく弾けることが出来たと思います。B50はもう少し工夫して練習するべきだったと思います。左手で早く弾こうとしてしまい、弾けなかったのが悔しいです。スピード→テンポをもっと意識することが大切だと思います。
	担当教員による評価	49番、50番合格しましたね。49番はとてもよく仕上がっていました。50番は少しミスがありましたが、反省点などが自分でわかっているようでしたので、次に進んだほうが良いと判断しました。完成度を高めることには今後もこだわってくださいね。52番は8分音符が基準になる新しい拍子記号です。ここでしっかり理解して、練習を丁寧に進めてくださいね。

9回 11月16日	到達目標	B57の完成・弾き歌いは左ページを両手で弾ける
	目標達成の方法	4分の3拍子のリズムを意識・口に出しつつ練習してリズムをとれるようにする。弾き歌いは1小節ずつミスがなくなるまで練習し、次の小節に進むようにする。
	自己評価	B57はリズムを意識したことで問題なく弾けたと思います。このリズムを次回のB60でも意識したいと思います。弾き歌いは少しずつ慣れてきていると思います。次回までには左ページを完璧にしたいと思います。
	担当教員による評価	バイエル57番は良く弾けていましたね。カウント(リズム)の取り方が正確でした。合格ですね。音読みに関しては、理解が進んでいるという印象です。この調子で進めていきたいですね。「赤鼻のトナカイ」は、1段ごと、もしくは2段ごと
10回 11月23日	到達目標	練習を進めたほうが仕上がりが早いかなと思い、一緒にやりました。少しずつじっくり完成させていきましょう。
	目標達成の方法	B60はリズムを意識して、最後まで完璧に弾けるようにする。弾き歌いは左ページを弾けるようにし、右ページを少しずつ練習する。
	自己評価	リズムを意識するために声を出しながら弾く。楽譜に基準の指番号を書き、練習する。
	担当教員による評価	

(3) 課題

学生一人あたりわずか十数分というオンラインレッスンの時間の大部分を言葉による説明の時間が占めることになり、その結果、ピアノ演奏の時間が少なくなってしまった。もとよりピアノ演奏の習熟にとってピアノを弾く行為の積み重ねは欠かせない。特に、難しい箇所を取り出し部分練習・反復練習を繰り返すことによって、ピアノ演奏の習熟が促進される。従って、1回あたりの授業展開と同時に15回の授業単位での長期的な見通しを立て、本実践で試みた①と②の方法に加えてピアノ演奏の習熟のための指導を組み合わせ、実践を改善していきたい。

4. おわりに

本稿の目的は、「音楽科目」におけるピアノレッスンにおいて行なわれたオンライン授業実践を省察し、保育者養成教育の枠組みの中で学生がピアノ演奏に関する知識・技術を修得することによってオンライン授業にはどのような利点と課題があるのか明らかにすることであった。そのために、本学における「音楽科目」でのピアノレッスンにおけるオンライン授業の導入の経過を振り返り、ピアノレッスン担当教員がそれぞれのピアノレッスンにおけるオンライン授業実践について省察し成果と課題を明らかにした。以上をふまえて、保育者養成教育を受ける学生のピアノ演奏に関する知識・技術の修得にとってのオンライン授業の利点と問題点及び今後の研究課題について、以下のとおり考察する。

(1) ピアノレッスンにおけるオンライン授業の利点

第一の利点は、模範演奏の演示における視覚情報のわかりやすさである。酒井実践にあるように、模範演奏の演示やピアノ演奏の初歩的な技術指導においては、オンライン環境下でカメラアングルを工夫することによって、学生にとっては教員の模範演奏における特に手指の操作-鍵盤-楽譜の対応関係が把握でき自らの演奏の参考にしやすくなるということがわかった。

第二の利点は、歌唱行為を伴う弾き歌いの練習の実現である。酒井実践にあるように、子どもの歌を教材とした弾き歌いの練習場面で歌唱行為が可能になるということがわかった。新型コロナウイルス感染症の流行により「新しい生活様式」として「3密（密閉・密集・密接）」を避け「歌や応援は十分な距離かオンライン」という例が示されており（文部科学省2020b）、教育活動としての集団での歌唱活動が困難な状況が続いている。狭いピアノレッスン室で1対1の面接レッスンを行う環境下では、感染症予防の観点から歌唱行為は許されない。一方、学生と教員が別の場所に居ながらオンタイムでつながる「ミーティング型」¹⁶⁾のオンライン授業であれば、身体的・物理的距離をとることができ、同時に双方向的なコミュニケーションによる心理的・社会的距離をできるだけ縮め社会的なつながりを感じることができる。このようなオンライン授業の利点を生かして、学生は子どもの歌を歌いながら弾く練習を遠慮なく行い教員の指導を受けることができるだろう。

第三の利点は、演奏動画における自発的な練習の足場としての役割の発揮である。「音ゲー動画」を開発した藤原実践や「手元動画」を開発した森田実践にあるように、視覚情報と聴覚情報が統合されたマルチメディアとしての演奏動画が、ピアノ演奏初学者の学生にとって予習・復習の補助教具として有効に機能するということがわかった。従来であれば、ピアノ演奏初学者の学生ほど与えられた教材曲がどのような音楽なのか知るためには、面接レッスン時における教員の模範演奏またはインターネットで無料配信されている演奏動画を視聴するしかなかった。一方、「音ゲー動画」や「手元動画」は教員がピアノ演奏初学者である読譜に躓きを抱えている学生のニーズを考慮して開発が試みられているため、学生にとって使い易かったのではないかと推測している。この点については、今後も検証や開発教具自体のさらなる改良が必要であるが、学生のニーズを考慮して作成されたマルチメディアとしての動画は、学生が授業以外の時間帯に自発的にピアノ練習を進める上での効果的な「足場」¹⁷⁾として機能する可能性が期待できる。

第四の利点は、学修記録におけるコミュニケーションとリフレクション（行為と結果の関係に対する振り返り）¹⁸⁾を促す役割の発揮である。本稿で取り上げた全ての実践にあるように、教員は面接レッスンではできていたがオンラインでは難しくなってしまった直接的なコミュニケーションの断裂を埋めようと、学生に対して学修記録への記録を促し続け自らも具体的に助言し続けるなど、学修記録上で活発にコミュニケーションを図ろうとしていた。そのような学修記録を通した言語的なコミュニケーションの過程で、リフレクションが促進されていたと言えないだろうか。そして、リフレクションは学びの主体である学生にも教えの主体である教員にも起こっていたと考えられる。

第五の利点は、コミュニケーションと思考を促進させる言語の役割の発揮である。山本実践にあるように、教師側が読譜に関する初歩的な知識を共有する言葉を精選し、楽譜の読み方を学生の進度に合わせて説明することにより、学生は教員の言葉を自らの言葉に取り入れてリフレクションを行うことができるようになっていた。「言葉の尽きるところから音楽が始まる」というホフマンの言葉はさまざまところで使われており、演奏と言葉の間には乖離があるのはもっともだろう。言葉よりも演奏そのもので教えるべきだという意見も当然あるに違いない。しかし、保育者養成教育を受けるピアノ演奏初学者にとって言葉は音楽の世界に入っていき鍵であり、その鍵を手に入れることによって音楽の理解が広がり深まるのではないか。その意味で、音楽の知識に関する概念を表す言葉は、ピアノ演奏初学者である学生とピアノ演奏熟達者である教員との間のコミュニケーションを成立させる共通言語として重要な役割を果たし、さらには音楽に対する思考を促進させる役割をも果たすと言える。そのことがオンライン授業によっていみじくも浮き彫りになった。

(2) ピアノレッスンにおけるオンライン授業の問題点

最も大きな問題点は、同時双方向によるオンライン環境ではタイムラグが生じるため、教員は学生の歌唱演奏に合わせてピアノを弾いたり歌ったりすることは極めて難しいという問題である。この問題は面接レッスンの実施によって初めて解決する。他の問題点として、学生と教員双方のオンライン環境の構築状況がピアノレッスンの進行状況に影響を及ぼすという問題がある。この問題は、環境改善や情報通信機器の取り扱いの習熟によって解決可能である。何れにしても、オンラインレッスンと面接レッスンにはそれぞれの利点や問題点があり、ポスト・コロナ時代の大学での学習環境として、オンライン授業と面接授業を相互補完的に組み合わせたハイブリッド型授業システムを構築することが必要ではないだろうか。

(3) 今後の研究課題

本稿により得られた示唆をふまえて、保育者養成教育としてのピアノレッスンにおけるオンライン授業の環境・内容・方法について、授業実践記録の詳細な分析を根拠とした知見を得ることを今後の研究課題とする。

註

- 1) 遠隔授業とは、「離れた場所同士で映像や音声などのやり取りを行うためのシステム」である「遠隔教育システムを利用して、離れた学校や講師などをつないで行う授業」を指す（文部科学省2018）。
- 2) 面接授業とは、教員と学生の直接対面によって行われる授業形態を指す。この用語については、「遠隔授業」と「面接授業」の用語を対にして使用している文部科学省（2020a）に準じている。一般的には「対面授業」と称される場合が多い。
- 3) 荒井（2010）、妹尾他（2018）、寺田（2014）、小島（2018）に掲載されている楽譜を教材とした。
- 4) 筆者が用いたPCは、MacBook Air 13-inch（128GB SSD、8GB RAM、Late2018モデル）である。このモデルにはUSB-C端子しかないため、当初はUSB3.0への変換アダプタを使い、安価なWebカメラを使用していた。しかし、遅延が激しかったため、後にWebカメラをロジクールStream Cam C980

に変更しUSB-C端子に直結した。

- 5) FinaleはMake Music社の楽譜作成ソフトウェアである。今回はversion25を中心に利用した。
- 6) 「音ゲー動画」の開発研究については、藤原(2021)を参照している。
- 7) 動画作成にあたり、KAWAIスコアメーカーの利用規約を確認している。<https://cmusic.kawai.jp/products/sm/copyright.htm> (2020年11月18日確認)。
- 8) 動画作成にあたり、Synthesiaの利用規約を確認している。<https://www.synthesiagame.com/vid> (2020年11月18日確認)。
- 9) 動画のアップロードにあたり、YouTubeの利用規約を確認している。<https://www.youtube.com/static?template=terms&hl=ja&gl=JP> (2020年11月18日確認)。
- 10) QRコードをスマートフォン等の専用アプリで読み取ることでYouTubeにアクセスすることができる。「音ゲー動画」の作成者である藤原は、アララ株式会社が提供するQRコード作成サービスである「クルクル マネージャー」を使用してQRコードを作成した。QRコード作成にあたり、「クルクル マネージャー」の利用規約を確認している。<https://m.qrqrq.com/service/terms/> (2020年11月26日確認)。
- 11) 《バイエル》の「音ゲー動画」と「手元動画」を紹介した2名の学生に対して、使用実態を知るために2020年7月9日にWebアンケート調査を依頼し、2名から回答を得た。
- 12) 学生はおそらく「音名」の意味で「音階」という言葉を用いて記述したと推測される。
- 13) 動画のアップロードにあたり、YouTubeの利用規約を確認している。<https://www.youtube.com/static?template=terms&hl=ja&gl=JP> (2020年11月26日確認)。
- 14) QRコードについては10)に同じ。「手元動画」の作成者である森田は、株式会社インフォリオが提供するQRコード作成サービスである「QRのススメ」を使用してQRコードを作成した。作成に当たり、利用規約を確認している。<https://qr.quel.jp> (2020年11月26日確認)。
- 15) 正式な名称は「丸」ではなく「たま」であるが、オンライン上で楽譜に書かれている音符の名称を知らない(既習だったとしても忘れていた)学生に対して、本実践では便宜上「丸」という呼び方で指導した。楽譜上の音楽記号をどのような言葉で言い表すべきかということについては、再検討し改善していきたい。
- 16) 石井他(2020)では、オンライン学習が「ライブ講義型(ライブ型の動画配信)」「オンデマンド型(オンデマンド型の動画配信・プリント学習)」「ミーティング型(テレビ電話ツールを用いた双方向アプリ)」「課題提出型(手紙・メールやSNSなどの双方向アプリ)」の四つに類型化されている。本稿で取り上げたオンラインでのピアノレッスンは、Teamsのビデオ会議機能を活用した「ミーティング型」に相当するが、実際には模範演奏の動画配信などによる「オンデマンド型」や学修記録のやり取りによる「課題提出型」が組み合わされている。
- 17) ここでは演奏動画が学習者の自発的な学びを促進させる学修援助の道具として捉えられるという考えから、「足場」という用語を用いて説明した。「足場かけ(scaffolding)」とは「子どもの目標となる行動を達成するために大人が指示したり質問したりさまざまなプロンプトを与えるなどの援助をすること」と定義されている(藤野2010)。
- 18) 藤本佳子は、音楽的思考におけるリフレクションについて、J・デューイの理論に基づき「音楽的思考の過程の中で、学習者の行為とその結果の関連に注目し、行為によって何が変わったのか探り、行為による結果を予想してそれをもとに再度試行するというサイクルが連続的に進んでいき、経験の方向性を定めていくもの」と説明している(藤本2019)。本稿では藤本の説明をふまえ、「リフレクション」の用語を「行為と結果の関係について振り返ること」と定義している。

引用・参考文献

- 荒井広高監修/高御堂愛子・田政成・井中あけみ・岡田泰子・近藤茂之・藤本逸子（2010）『小学校教諭・幼稚園教諭・保育士をめざす人のための Let's play the BEYER』圭文社。
- 藤本佳子（2019）「問題解決としての音楽的思考におけるリフレクションの機能—思考の連続性に着目して—」日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育研究』Vol. 23, p. 4。
- 藤野博（2010）「足場かけ（scaffolding）」佐伯胖監修/渡部信一編『「学び」の認知科学事典』大修館書店, p. 216。
- 藤原一子（2021）「弾き歌いにおけるピアノ伴奏の予習・復習を行うためのデジタル教具作成の試み—保育士・幼稚園教諭養成課程に在籍する学生を対象として—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第54号（印刷中）。
- 石井英真監修/秋山貴俊・長瀬拓也編著（2020）『ゼロから学べるオンライン学習』明治図書, p. 27。
- 小島律子監修（2018）『三訂版 小学校音楽科の学習指導—生成の原理による授業デザイン—』廣済堂あかつき。
- 松井遼太・竹川佳成・平田圭二（2018）「Tel-Gerich：共同注視およびカメラスイッチングに着目した遠隔ピアノレッスン支援システム」NPO法人ヒューマンインターフェース学会論文誌 Vol. 20, No.3, pp. 321-332。
- 文部科学省（2018）『遠隔教育システムガイドブック 平成30年度 遠隔教育システム導入実証研究事業第1版』株式会社内田洋行 教育総合研究所。
- 文部科学省高等教育局大学振興課（2020a）「本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について」事務連絡, 令和2年7月27日。
- 文部科学省（2020b）「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル—「学校の新しい生活様式」—（2020.9.3 Ver.4）」文部科学省ホームページ（2020年11月30日確認）。
- 小栗祐子（2020）「保育者養成課程における対話型ピアノ授業での教師の働きかけ」日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育実践論集』4巻, pp. 120-121。
- 全音楽譜出版社出版部編（出版年記載なし）『全訳バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社。
- 妹尾美智子他編著（2018）『ピアノに夢中』共同音楽出版社。
- 城戸透・森山伸・岸啓子・横山詔八（2003）「ピアノ・エチュードの体系的研究Ⅱ—バイエルの研究（2）」『愛媛大学教育学部紀要』, 教育科学50（1）, 119-138。
- 寺田真由美監修/寺田雅典（2014）『保育のうた155』ひかりのくに株式会社。

謝辞

本稿では、諸事情により今年度にピアノレッスンを担当している一部の教員が授業実践報告を分担執筆したが、執筆の背景には十数名にも及ぶピアノ実技指導担当の非常勤講師の先生方の試行錯誤と苦心の実践、専任教員として今年度が最後の任期であった藤本逸子教授の粉骨碎身の授業環境整備や筆頭筆者（横山）へのご助言があった。紙面を借りて感謝申し上げます。

付記

1. 本稿では、横山真理が全体の監修を行った。執筆分担は、次のとおりである。1.はじめに、2.オンライン授業の導入と実践の経過、4.おわりに（横山真理）。3.1オンライン指導への環境整備と基本指導

手順の構築（酒井国作）。3.2補助教具としての「音ゲー動画」の活用（藤原一子）。3.3補助教具としての「手元動画」の活用（森田千智）。3.4教師が用いる言葉の精選—読譜を中心に—（山本馨栄子）。

2. 本稿は、東海学園大学研究倫理委員会の審査と承認（受付番号2020-10）をふまえて執筆された。